

# 地域の パンデミックプランニング

## 次の新型インフルエンザ発生に備える!! —新型インフルエンザ発生時の予防接種体制の構築—

田辺正樹

三重大学医学部附属病院医療安全・感染管理部准教授

岡部信彦

川崎市健康安全研究所所長

2009年に発生した新型インフルエンザ(A/H1N1)への対応を振り返ってみると、ワクチン接種が最も大変であったと感じられる方も多いのではないと思われる。次の新型インフルエンザ発生に備え、「新型インフルエンザ等対策特別措置法」(以下、「特措法」)が2013年4月に施行され、同年6月に具体的な対応方針を定めた「新型インフルエンザ等対策政府行動計画」(以下、「政府行動計画」)および「新型インフルエンザ等対策ガイドライン」(以下、「ガイドライン」)が策定された。新型インフルエンザを想定した新たな体制において、予防接種はどのように行われるのか、また、実施主体となる市町村では、どのような検討が行われているのだろうか？

本稿では、新型インフルエンザ発生時のワクチン接種体制の概要と厚生労働科学研究班(研究代表者：岡部信彦、

分担研究者：田辺正樹)において実施された住民接種シミュレーション<sup>1)</sup>を中心に紹介する。

### 1 パンデミックインフルエンザにおけるワクチン接種の歴史について

インフルエンザが周期的に世界的大流行(パンデミック)を起こすことは、以前から知られている。20世紀には、1918年のスペインインフルエンザ、1957年のアジアインフルエンザ、1968年の香港インフルエンザの3回のパンデミックが、また、21世紀に入ると2009年に新型インフルエンザ(A/H1N1)が発生した<sup>2)</sup>。1918年のスペインインフルエンザ発生当時、インフルエンザワクチンは存在しなかったため、ワクチン接種は行われていないが、1957年のアジアインフルエンザ発生時にはワクチン接種が行われている(図1)<sup>3)4)</sup>。ワ

クチンの形態としては、1971年まではウイルス全粒子を不活化した全粒子ワクチンであったが、1972年以降、エーテル処理によりHAを精製したスピリットワクチン(インフルエンザHAワクチン)に改良された。インフルエンザワクチンの生産量は、1980年代後半から2000年代前半に減少した後、増加に転じている。2009年の新型インフルエンザ発生時は、季節性の3価ワクチンとは別に、A型インフルエンザHAワクチン(H1N1)が生産・接種された。

新型インフルエンザ(A/H1N1)への対応に関しては、厚生労働省において総括会議が開催され報告書として取りまとめられている<sup>5)</sup>。ワクチンに関しては、供給体制、費用負担、接種・予約体制、副反応発生状況の把握、ワクチン接種回数、接種順位のあり方などの課題が挙げられた。これらの課題を